「責任ある・使命ある大学」の将来像を語ろう！

東北福祉大学　研究企画推進課　課長　古藤隆浩

通信教育部職員として、福祉・医療現場の矛盾や課題の解決、よりよい対人支援のために熱心に学ぶ社会人学生を見て来た 18 年、全学内部質保証担当の 2 年を経て、研究推進部署に異動した経験から私が期待する高等教育のあるべき姿、大学の将来像を述べたい。

将来像１（社会実装）　個人や社会や大学の課題を学問の力で解決する大学

課題をかかえる組織や地域、成長力の鈍化や夢を持てない日本社会、悩める個人や家族の増加。諸学問の科学的、哲学的、実学的な思考や知識を総合し、個人や社会の課題の解決策を提示できる大学でありたい。理想を語る、具体的な解決策を提示する、データを基にエビデンスを述べるなど学問の力や成果の社会実装に自信をもちたい。実装にあたっては、持続可能性とともに、ひとりも取りこぼさない包摂性を意識したい。まず、大学自身の課題や利害調整を、諸学問の成果、学内外との連携と対話により解決したい。

将来像２（研究）　自由な発想で研究成果を生み出しファンを増やす大学

教員が学び考える楽しさ・自由な発想を体現して、新たな研究成果を生み出し、学生がその姿にあこがれ、生涯をかけて専門性や幅広い教養を身につけたいと実感できる大学でありたい。枕草子もロールズも量子力学も AI も、人生を豊かにし社会実装にも使える。課題や指標、科学技術の前提となる価値の吟味、転換など、人文・社会科学の役割は大きい。研究成果を教育や社会貢献にいかして大学ファンを増やせば、オンライン教育が進んだ今、リカレント教育や、寄附・CF などでも大学にメリットがあろう。

将来像３（教育）　学習者主体の学習成果が実感できる自由な大学

専門性も幅広い教養も大切だが、すべてを教え込むのは難しい。到達目標を持たない教育は無責任だが、最初から身に付けられることが決定されている教育は学生も教職員も望んでいない。失敗の経験とレジリエンス、目標や計画があるなかの偶発性、カリキュラムの内でも外でも個々人それぞれの学習成果の実感が得られる大学でありたい。お仕着せの道を歩ませず自らが選び、他者と自己の立場の違いを認め自由を尊重するなかでの教育は ELSI を考える基礎になり、一人ひとりが輝く社会をつくる原動力にもなるだろう。

将来像４（居場所）　豊かな経験・時間と出会い・発見・承認が感じられる大学

大学は教育と研究の場だが、学生や教職員の居場所の役割も大切ではないか。講義・演習など正課の授業だけでなく、友人との語らい、ボランティア、インターンシップ・留学などの経験、好きなことに打ち込める豊かな時間がもて、予測不可能な出会いや発見があり、排除なく承認を感じられる場所でありたい。図書館で本を読み、作者と対話する時間など個々に合った経験や出会いも大切にしたい。キャンパスだけではなく、へだたりのあるオンラインでも、経験の質は異なっても、やりとりし、つながる場はつくりたい。

将来像５（組織）　学生と教職員が主役の大学

近年、大学の経営面が重視されているが、学生や教職員自らが大学づくりに参加しないと、内部から腐敗し魅力ない組織になる。不完全だが勢いある若さ、経験知、諸学の知など多様な英知を集め、不合理な既得権や慣例は廃し、適切なボトムアップとトップダウンで、各大学が個性的なグランドデザインをつくれないか。迅速な意思決定・質保証や適切な競争と充分な相互扶助が行われている、学生と教職員が主役の大学をつくりたい。

理想や正義、将来像を語る怖さ、語らない怖さの双方を意識しつつ、主張を終えたい。